

じんけん瓦版 第70号

発行日：2018年8月25日

発行：日本聖公会東京教区 人権委員会

2018年 沖縄週間／沖縄の旅

命どう宝（ぬちどうたから）～キリストを生きる～に参加して

関 澄子（小金井聖公会信徒）

今年の沖縄平和の旅は表記のテーマで行われた。今回の平和学習は伊江島で聴く二つの証言を通してその戦争と、戦後の土地闘争の実相に触れ、命と人権が侵され続けた歴史的事実の中からつかみ取った平和への強い思いと実践について学ぶものであった。

証言して下さったのは、島袋満英さんと謝花（じやばな）悦子さん。おふたりの証言のうち、ここでは特に謝花悦子さんの証言に触れてみたい。な



謝花悦子さんの証言を聴く参加者

ぜなら伊江島土地闘争と平和活動のため 40 年間阿波根昌鴻（あはごん しょうこう）（1901～2002）さんと共に働き続けた彼女の証言が私には強い衝撃として感じられたからである。

阿波根さんは戦前南米での移民生活の後に故郷の伊江島に土地を得て農民として暮らしていたが、沖縄戦では一人息子の戦死という耐え難い経験を、戦後は米軍の基地拡張のもとで多くの農民と共に自分の土地を奪われた。米軍はその際、拳銃とブルドーザーで農民の土地を強奪したという。非暴力を貫いて土地奪還闘争を始めた阿波根さんと共闘した農民は本土復帰前には千人いた。しかし、復帰後日本政府は軍用地料を大幅に引き上げ

たため農地を米軍基地使用に提供する「契約農家」が増えていった。サトウキビ栽培から得る収入より軍用地料として得る金額のほうが多いため若年層の農民の多くが「契約農家」となっていった経緯が多く見られた。このように、日本政府は巧みに伊江島の農民に“基地を前提とした生活”を押し付けたのである。

しかし、1982年には反戦地主たちの土地を一坪買うことで新しい闘争を進める「一坪反戦地主」運動が始まった。阿波根さんの土地闘争の原点には、戦争を準備し、遂行することがいかに人類を不幸にするかという強い問いかけがあったと理解する。この問いかけが形をとったのが「わびあいの里」であり、反戦資料館である。「わびあいの里」は弱い人、高齢者、子ども、旅人たちが泊まり込み、助け合って働き、語り合う場所として作られた。

私たちはこの「わびあいの里」の中の「やすらぎの家」で謝花さんの証言を聴き、彼女に促されて反戦資料館（「ヌチドゥタカラの家」）に足を踏み入れた。そこには驚くほどさまざまな物が“雑然と”展示されていた。伊江島に投下された爆弾、米軍が投下訓練で使った模擬原爆、無数の葉きょう、爆弾解体中に爆死した二人の若い島民の写真、米軍が立ち入り禁止のために使った有刺鉄線、沖縄戦で亡くなった赤ちゃんのボロボロの着物類、米軍の葉きょうから作った鍋、タイヤから作った草履など、天井からは米軍のパラシュートや土地闘争で使った横断幕等々。阿波根さんはこの資料館を「ガラクタの山」と呼んだ。そして、このガラクタの一つ一つを通して戦争がもたらす結果を

熱くしかし真摯に伝える「平和の語り部」としての役割を自らに課した。

「沖縄は被害者としての歴史を生きてきました。しかし、今加害者としても歩かされている沖縄です。基地がある限り戦争は終わっていません。」と謝花さんは言う。在日米軍専用基地の74%が沖縄に強要され人権が軽視されている。本土で暮らす者のひとりである私はこの現実への直視と行動を強く問われていると感じる。

路上の観光用地図には三本の米軍滑走路が載っている。4本目のF35ステルス戦闘機演習用滑走路がすでに建設されていると聞く。伊江島を去る前に二つのガマを訪ねた。私はそこで静まり返る暗い空間の向こうから伊江島住民と日本兵が過ごした地獄に等しい時間の流れの漂いを感じた。今回の平和の旅で一つ嬉しかったことは数名の青年

1945年4月16日から始まった伊江島戦の激戦の末、アハシャガマに隠れていた村民は米軍の捕虜になるのを恐れ、防衛隊が持ち込んでいた爆雷で自爆し、村民約150人の尊い命が失われました。その時、生き残った者は20人ぐらいと言われていました。壕は爆発で埋没したままになっていましたが、1971年12月に村民の手で発掘され、遺骨は芳魂之塔に合祀されています。

アハシャガマ Ahasha Cave

たちが参加したことである。彼らがこの旅で体感したものは必ず次の世代へのバトンとなるに違いないと信じるから。

沖縄戦没者追悼式で中三の相良倫子さんが力強く、爽やかに読み上げてくれた詩「生きる」に心打たれた。

鎮魂歌よ届け／悲しみの過去に／命よ響け／生きゆく未来に／私は今を、生きていく。

~~~~~

### ハンセン病問題から学ぶ集い 講演会「“人間回復の瞬間“を経て” ～上野正子さんの語りを聴く～（星塚敬愛園自治会副会長／語り部）

小林幸子（東京聖三一教会信徒）

去る6月23日の午後、台東区にある福祉プラザでその講演会はありました。

上野正子さんにどうしても会いたい、会ってお話を聴きたいとの思いで講演会に参加しました。110名余の参加者です。2001年5月熊本地裁で「らい予防法違憲国家賠償請求訴訟」は全面勝訴しました。上野正子さんは、その第1次原告13人の中の1人です。

上野さんは1927年沖縄・石垣市生まれの92歳



上野正子さん

です。1940年県立第二高等女学校入学。1年生の時に発病し鹿児島・星塚敬愛園に入所。以来78年間を敬愛園で過ごされています。帰りたくても故郷に帰ることができない日々を送ることになったの

です。将来、学校の先生になりたいとの少女の夢は、入園番号1801号とともに砕かれてしまいました

た。「らい予防法」による強制隔離でした。

上野正子さんは、足に「たむし」のようなものが出来、ハンセン病専門医に見せるよう言われ、沖縄から父親と船に乗り2日かけ鹿児島島の垂水港に到着。タクシーで行こうとして、運転手に敬愛園へ行くことを理由に断られ、父親と徒歩で32キロの道を一晩野宿し、ハンセン病療養所星塚敬愛園に着きました。

喉が渴いて「水を飲ませてください」と職員に頼むと、父親の分のみコップで、上野さんには離れた所の患者専用の水道で飲むように言われました。職員が去ると父親は両手を出させ、手に水を注いでくれました。「ここは地獄やな」と父親の言った言葉が忘れられません。ハンセン病差別の最初の経験です。父親は、上野さんがハンセン病と診断された次の朝、黙っていなくなっていました。捨てられたと思い、泣き叫び父を恨みました。しかし数年後に、父親はもっと辛かったことに気づきました。

須山八重子という「園名」を与えられた上野さんは少女舎に入れられ、治療部隊として重症者の看護助手を命じられます。当時 1000 人以上いた入所者に対し看護婦は 13 人、有資格者はその半数だったそうです。賃金、月額 50 銭はブリキでつくられた園内通貨で支払われました。施設運営のあらゆる作業は、患者自身が行わなければなりませんでした。逃亡を防ぐために有刺鉄線で囲まれ、懲罰用監禁室もある施設は、「療養所」とは名ばかりの、まさに「強制収容所」そのものでした。17 歳になり乙女寮に移った上野さんは、軽症の伴侶を求め、元警察官の上野清さんと 19 歳で結婚。間仕切りもない 12 畳一間に 4 組もの夫婦が詰め込まれ、夜中、目覚めると、自分の顔のすぐ傍に夫ではない男性の顔があつてびっくりしました。翌朝、洗濯のために手にした夫の下着が血とヨードチンキで汚れていたの理由を聞くと、「断種手術を受けた」という答えでした。入所者が子孫を残せないよう、断種が結婚の条件とされていたのです。自分に相談もなく断種したことを「残念に思った」と語る上野さん、それが墮胎で妻を傷つけないための夫の愛情であったことを知りました。園内には強制墮胎された胎児、嬰兒がホルマリン漬けにされ、何十体も陳列されていました。

洗濯場に勤めるようになった時、両手を熱湯火傷した上野さんは、処置が悪く、両掌が開かなくなりました。過酷な労働と医療不足が入所者の病状を重くしたのです。戦後プロミンの投与を受け病は完治しました。今、園にいる人は全員回復者です。後遺症があるだけで伝染しません。1996 年、入所者たちの命をかけた闘いによって「らい

予防法」が廃止され、上野さんは 1998 年、国賠訴訟一次原告団に加わりました。「感謝を知らないクリスチャンだ」と非難されましたが、牧師からは「神の御心だから頑張れ」と励まされたそうです。(上野さんは徳田祐弼司祭に導かれ聖公会の信徒になられています)

2001 年の勝訴後の 2002 年、62 年ぶりに故郷に帰りました。沖縄県立第二高女の同級生の多くは、白梅学徒隊として沖縄戦で戦死していました。同じ原告だった夫の上野清さんは 2006 年逝去されます。

上野さんは「ハンセン病になったことを後悔していない」と話されました。

それは、「神さまからの役目を頂いている」のだと。二度と同じことを起こさないために語り部として伝えてゆくことがその役目であると。今、上野さんは全国の学校で講演し、証言されています。教師にはなれなかったけれども先生のように子供たちに熱く伝えています。2001 年 5 月の勝訴の日から須山八重子の名を捨て、本名の上野正子に戻られました。その日が第 2 の誕生日なので、現在 17 歳だそうです。辛い苦しい体験ですが、ユーモアを交えながら話されました。

上野正子さん、どうぞお元気でこれからも体験を伝えてください。

国の誤ったハンセン病政策により 90 年も続けられた人権侵害。わたしたち国民一人一人が、差別に加担し続けてきたことに気づき、魂の訴えを聴きたい。

そして、その心を受け継いでいきたいと思います。

~~~~~

桜井昌司さんをお招きして

「布川事件を通して、冤罪・再審問題を考える」講演会

日本聖公会有志「一羊会」森田麻里子

☆映画「獄友」

映画「獄友」は冤罪被害者の袴田事件の袴田巖さん、狭山事件の石川一雄さん、足利事件の菅家利和さん、布川事件の桜井昌司さん、杉山卓男さんのドキュメンタリー映画です。

3 月映画館で初日舞台挨拶があり、桜井昌司さん

と再会しました。

「仙台北陵クリニック事件」で無実を訴える守大助さんを支援している「一羊会」は、2010 年桜井昌司さんをお招きしましたが、大崎事件の冤罪被害者原口アヤ子さん支援のためにお時間がありませんでした。

4月カトリック正義と平和協議会「死刑廃止部会」と「一羊会」の合同企画で卓志雄司祭の講演会「愛する人の喪失、そして召命～遺族として、韓国人として、キリスト者として宗教と死刑を考える」をイグナチオ教会敷地内にある岐部ホールで開きました。卓司祭の講演会はカトリックが担当しましたので、「一羊会」担当として6月30日池袋聖公会で桜井さんに表題のテーマでお話をさせて頂くことにしました。

☆桜井さんのチラシ・メッセージ

「犯罪は、他人の人生に対する悪しき干渉です。他人の人生を曲げる犯罪は許されません。その犯罪を取り締まるべき警察や検察、裁判所が、誤って無実の人を犯人にする冤罪は、故に絶対に許されないのです。しかし、日本の司法は、証拠捏造も辞さないし、無実の証拠を隠すことも、平然と行います。なぜでしょうか？

森友問題などで明らかになった、公務員の嘘。日本は法治国家と言われますが、無法国家になっています。私は、その根源にあるのが司法の歪みだと感じています。冤罪を作る警察や検察の嘘が正當に裁かれる日本にしたい、それが私の願いです。そして、無実の罪で苦しむ仲間の力になりたいと願っています。」

☆桜井さんのお話

冤罪は警察官が作る。「やっていない。」と言っても、警官はすべてを否定する。「疑われる」ことは辛い。「お前だ」「お前だ」のやり取りが続くと、耐えられなくなり、「やった。」とウソの自白をしてしまう。「なぜウソの自白が出来るのか。」と言われるが、警察に疑われれば、誰もが犯人になる。裁判官は何の抵抗感もなく、「やっていない人が『やった』という訳がない。」と頭から人格を否定

し、有罪にする。間違った裁判官が罪に問われない。責任を問われない立場があつてはダメじゃないでしょうか。

日本には命を大切にしない思想がない。命を大切にしないから、弱い人に過酷な国家になる。

冤罪を背負わされ、命について考えさせられた。

「お前は死刑だ。」と言われ、悩み、苦しんだ。「いつか必ず死ぬ。」「今日は一日しかない。」と思って、獄中を生きてきた。国民救援会や牧師さんにもささえられ、自分は変わった。

再審は難しい。袴田さんの再審が取り消されて、本当に驚いた。仙台高裁は大助さんの再審請求を棄却したが、これからも一途な大助をささえていく。

☆守大助さんの支援者として

大蔵神父を始めカトリックから10人程ご参加がありました。「今市事件」の勝又拓哉さんのお母さんが参加され、無実を訴えられました。「冤罪」という過酷な人権侵害を耐え抜いて、多くの冤罪被害者の苦しみに寄り添う桜井さんの強い生き方に支援者としてエネルギーを頂きました。千葉刑務所に閉じ込められている守大助さんは最高裁に特別抗告をしています。大助さんの苦しみの傍らで祈り、私達もささえていきます。

*布川事件

1967年桜井昌司さんは杉山卓男さんとともに強盗殺人事件の犯人として、無実の罪で逮捕されました。長時間の取り調べで「虚偽自白」をさせられました。

公判で無実を訴えましたが、1978年最高裁で無期懲役が確定しました。

2009年再審が開始し、2011年無罪が確定しました。

守大助さんー仙台北陵クリニック・筋弛緩剤えん罪事件

2/28、仙台高裁は、再審棄却の不当決定を下しました。

守大助さんは、闘いの舞台を最高裁への特別抗告審に照準を合わせ、訴えています。

「私はやっていません。両親が元気な内に帰りたいです。

全国から最高裁へ「再審開始」の風を吹かせて下さい!!

勝利するため、皆さんの力を貸して下さい。助けて下さい。」

* 守大助さんを手紙で
支えてください

〒264-0023

千葉市若葉区貝塚町 192

守大助 様